論文

メキシコ西部における埋葬と世界軸
－竪坑墓の象徴性に関する一考察－

吉田 晃章 *

はじめに

メキシコ西部地域は、先スペイン期にアステカ文明が栄えた中央高原やマヤ文明の栄えた南部地域とは異なり、大きな建造物を伴う遺構は、比較的少なく、これまで考古学的な注目を浴びることは少なかった。西部地域から出土する遺物は、主にトゥンバ・デ・ティロ(tumba de tiro)と呼ばれる墓からの盗掘によるもので、埋葬文化として取り上げられてきた。紀元前後のおよそ 600 年間、この縦穴に水平墓室のついたブーツ型の墓が多数作られた。当時の人々はなぜ、このような形状の墓を作るようになったのだろうか。これまでの一般的な解釈では、墓室は子宮を象徴するもので、死後の再生や第二の生を意図して作られたと考えられてきた。しかしながら、近年の発掘調査により、このタイプの墓に関する詳細な発掘データが徐々に明らかになっており、研究の進展と考古資料の増加に伴い、埋葬に関する文化的解釈もその状況に応じて、再検討を迫られている。これまで墓の多様な形態的特徴を無視し、墓のみが取り上げられ文化的な解釈が与えられてきたが、本稿では墓の形態的特徴に応じて、墓を地上の遺構と関連づけることで、メキシコ西部の埋葬文化に関する新たな解釈の可能性について考察したい。

地図 1　竪坑墓のアーチ(Meighan and Nicholson 1970 **をもと作図**)

* 東海大学文学部アメリカ文明学科

1. 竪坑墓とその文化的解釈

1.1 竪坑墓とは

メキシコ西部では、これまで紀元前 300 年頃からトゥンバ・デ・ティロと呼ばれる約 2～22m の深さの縦穴を持つ水平墓室の埋葬伝統が出現することが知られていた[1]（図 1）。トゥンバ・デ・ティロとは、一般的に地表面から円形もしくは方形の土坑を垂直に掘り下げ、一定の深さまで到達したところで、水平方向のトンネルで接続する墓室を備えた墓である。

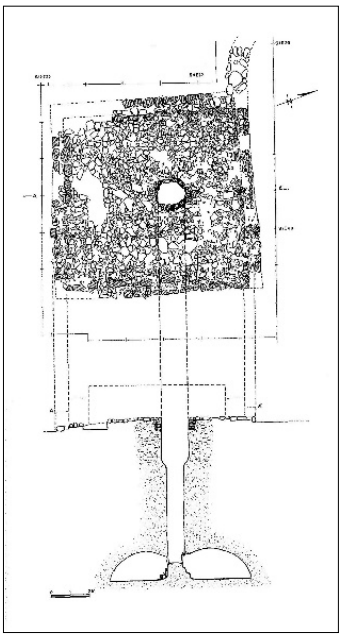


図 1　ウィツィラパ遺跡の竪坑墓（Mestas and Ramos 1998 Fig.6）

垂直の土坑つまり竪坑は、地表面の比較的柔らかい土壌の下に広がるテペタテ(tepetate)と呼ばれる固く締まった土層に達する[2]。これは、火山性の土壌であり、メキシコの火山帯に広く見られるが、この固く締まった土壌を利用し墓室が作られている。竪坑から墓室に入るトンネル部分は、一般的に狭く、墓室の天井はドーム状に弧を描き、内部空間が造りだされている。墓室の高さは、極端に低いものから、人が一人立って入れるようなものまで多様である。

墓室には、被葬者を取り巻くように土偶や土器、貝製品などの副葬品が置かれている場合が多い[3]。もちろん、墓室の規模、副葬品の多寡は、各墓で様々である。墓室の入り口は、墓室に土が入り込むのを防ぐため、平石やメタテ（擦り石）、あるいは大型の壺で蓋がされており、埋め戻されることはない。このため墓室は硬いテペタテの層に守られ、埋まることはなく、副葬品や埋葬体の保存状況は概して良好である。一方竪坑は、外観からはわからないように埋め戻される。

1.2 墓の分布と形状

先にも述べたが竪坑墓は、紀元前 300 年頃から出現し、広くメキシコ西部に分布する[4]。トゥンバ・デ・ティロの多くは、小高い丘の上や丘陵に位置しているが、そのうちのいくつかは斜面のテラスにある人工的なマウンドの下につくられている[5]。2015 年 8 月に訪れたアカトラン・デ・フアレス(Acatlan de Juarez)の竪坑墓は、小高い丘を利用した現代の墓地に位置しており、時代を超えて埋葬される場所が重な

写真１　アカトラン・デ・フアレス村の墓地（ハリスコ州）

写真 ２　墓地内部で確認された竪坑墓

る興味深いケースである（写真 1，2）。

メキシコ西部における竪坑墓の分布範囲は、コリマ州、ハリスコ州南部、チャパラ湖(Lago de Chapala)南西部・西部・北西部、そしてナジャリ州南部である。ミーガン(Clement W. Meighan)とニコルソン(Henry B. Nicholson)は竪坑墓が弓形に分布する地域を「メキシコ西部の墓のアーチ（The “tomb arc” of West Mexico）」と名づけている [6]（地図１）。この埋葬文化伝統は、メキシコ西部に限ったことではなく、

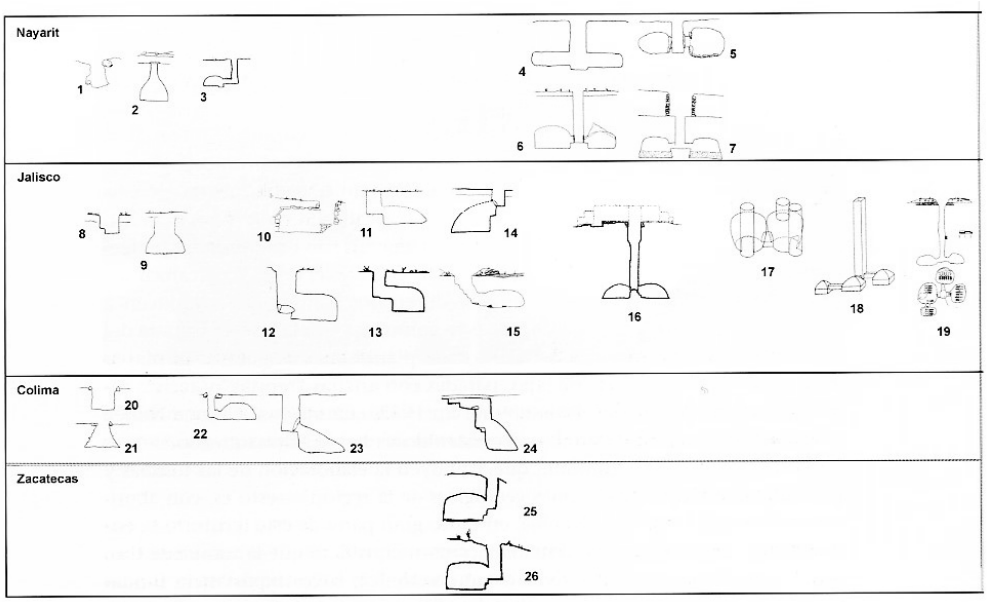


図２　竪坑墓の形状（Hernández 2013, Fig.5 より引用）

ナジャリ州:1)La Huizachera, 2)San Blas y Santa María del Oro, 3)Los Chiqueros, 4)Ojito del Agua, 5)El Maizal, 6)Corral Falso, 7)Las Cebollas, ハリスコ州:8)Cuenca de Sayula, 9), 11) El Grillo-Tabachines, 10)Amacuaca, 12)Usmajac, 13)Pochotitán, 14)El Piñon, 15)Citala, 16)Huitzilapa, 17)Pisotita, 18)El Arenal, 19)Cerro de los Monos, コリマ州:20),21)Los Copales, 22)Cardona, 23)El Mancón, 24)Loma Santa Bárbara サカテカス州:25),26)La Florida

新大陸では、北アメリカではメキシコ西部、中央アメリカではコスタリカ、南米ではペルー中央・北海岸、コロンビア、エクアドルと広く分布する[7]。

墓室の形状にもいくつかの種類がみられる（図 2)。竪坑墓のなかでも特殊な形状のビン型墓は、竪坑が直接墓室上部中央につながるもので、墓室は名称同様にビン型あるいは円錐形、もしくはフラスコ型をしている。この形状は、ハリスコ州北部のボラーニョス(Bolaños)地方に分布している（図 2-17)。円形の床面はコリマでは一般的であり、方形のものは、テキーラ山の北側に位置するエツァトラン＝マグダレナ（Etzatlan-Magdarena）地域でしばしば見られる形である。他にも、床面の形状には、楕円、長方形などが存在する。

エツァトラン＝マグダレナ地域のウィツィラパ遺跡(Huitzilapa)の竪坑墓のように、一つの竪坑に対し、二つの墓室を持つものや三つ以上の墓室をもつ竪坑墓も存在する（図 1、図 2-6,7,16,19)。複数の墓室は、基本四方位を意識して作られている。また、長い竪坑と副葬品の数などから考えても、複数ある形状のなかで、この長い竪坑を持つ墓は群を抜いている。また、墓室からさらに新たな墓室への入り口が作られ、墓室が竪穴を介さずに、連結している場合も見受けられる（図 2-18)。同地域は、テキーラ火山(Volcán de Tequila)の北側に位置し、火山性のテペタテの土壌が周辺に広く分布している。またコリマ州もコリマ火山(Volcán de Colima)があり、竪坑墓も多く分布する。最長の竪坑を持つエル・アレナル（El Arenal）遺跡もテキーラ山の北側に位置しており、同心円状の建造プランを構成する建造物の中心部に、竪坑墓が確認されている。この深い竪坑墓が存在する同心円状の建築プランの遺跡は、テキーラ山の南側にも分布している。

1.3 竪坑墓の利用

標準的な竪坑墓の竪穴の長さは、2m から 4m であるが、現在のところ、最長の竪穴をもつトゥンバ・デ・ティロは、グアダラハラ市(Guadalajara)とテキーラ(Tequila)村の間に位置するエル・アレナル遺跡にある。三つの墓室からなり、コロナ(Corona Núñez)が調査を行った時はすでに、村人に盗掘されたあとであった[8]。盗掘者の話によると、どの墓室にも複数体が埋葬されていた。

トゥンバ・デ・ティロには、埋葬される遺体の数は決まっていない。個人墓の場合もあれば集合墓の場合もある。アテマハック盆地(Valle de Atemajac)のタバチーネス（Tabachines）遺跡では、4 体が一つの墓に埋葬されていた場合もあり、9 体かそれ以上が同時に埋葬されていた事例も存在する[9]。複数の遺体が埋葬される主な理由

を考えてみると、まず一つは、事故や病気で一度に数人が亡くなったため、もう一つは高位の人物が埋葬された時に何人かの副葬があったため、それから、同じ家族の構成員によって再利用された場合が考えられる。第一番目の事故というのは、古代ではあまり考えにくい。病気で亡くなるケースはあるだろうが、現在のところ病理学的に証明されているわけではない。第二の生け贄として副葬されたケースであるが、

これはタバチーネスにおいて、確認されている [10]。第三の再利用のケースも既にケリー(Isabel Kelly)が証明している [11]。この場合、何世代か後に再利用するだけでなく、コリマ州のオルティセス期（Fase Ortices：紀元前 300 年-紀元後 100 年）につくられたトゥンバ・デ・ティロが、数世紀隔てたコマラ期（Fase Comala：紀元後 100- 600 年）に再利用されている。

竪坑墓は、追葬され家族墓の性格を持つものもあり、散在するのではなく、墓地的空間をつくり出している場合が多い [12]。例えば、ケリーの発掘したコリマのエル・マンチョン（El Manchon）遺跡では、6 つの墓が集中していた(図 2-23)。またナジャリのラス・セボージャス（Las Cebollas）遺跡では少なくとも 38 個の墓が墓地を形成するかたちで、見つかっている [13](図 2-7)。このことから特定の集団で、墓域を利用していたことも窺える。墓の利用の観点からは、個人墓か集合墓か、追葬をするかしないか、さらに墓域を構成するかどうかなど、細かく見ていくと竪坑墓の利用形態は、単純ではないことが理解できよう。

1.4 竪坑墓に関する従来の文化的解釈

竪坑墓から出土する貝製品とシャーマニズムについて研究を行ったファースト（Peter T. Furst）は、1960 年代に竪坑墓の象徴性について触れ、竪穴は膣であり、墓室は子宮であると述べて、竪坑墓は祖先信仰を示しているとしている [14]。また、埋葬コンテクストの土器研究を行ったフエンテ(Beatriz de la Fuente)は、竪坑墓に付された文化的意味についてまとめている [15]。墓の形状は、象徴的また宗教的概念の兆候を何も示さないとするコバルビアス(Covarrubias 1961)や出土遺物の研究から呪術的宗教的意味を主張するトスカーノ（Toscano 1970）の解釈に触れ、フエンテ自身は、竪坑墓は「産道と子宮のイメージで作られた。亡くなった人間は、その起源を想起させる空間に置かれた。女性と同様に、大地は偉大で多産であり、つまり母である。」と述べ、生命を育む聖なる母である大地あるいは、大地母神をイメージして、竪坑墓の解釈を行っている。さらに「大地から生命を与えられた者たちが、その子宮に帰ることは不思議ではない」とし、「別の生を始めるために、産道へ戻っていくと

いう信仰が存在していた可能性」を指摘している。また、墓は、終の棲家であり、死後生活する場所として考えられるとも記述している。50 年代から 60 年代にかけてようやく、竪坑墓の学術的な調査がはじまった頃の考古学的資料から、このような解釈が行われ、現在まで受け継がれている。

従来の竪坑墓の象徴性は、多くの人々が訪れるメキシコ国立人類学歴史博物館の竪穴墓の解説文を見ると明らかである。「埋葬遺構の象徴性は、死後の世界で第二の生を得るために誕生の状態を再現したのだろう。つまり、竪穴と墓室は女性の生殖器官を想起させるものだったのだろう」[16]と書かれており、女性の子宮をイメージして、死後の世界での再生を意識する解釈となっている。死後の再生、あるいは死後に第二の生を得るものと考えれば、確かに再度子宮から生まれ出ることを当時の人々が想像し、墓を生殖器官に模してつくったと解釈することは、的外れではあるまい[17]。

しかしながら、様々な特徴を有するバリエーション豊かな竪坑墓は、女性の生殖器官を象徴するという解釈だけで済ませることは適当ではない。600 年の長い伝統と広範囲に及ぶ分布から、竪坑墓に与えられた意味の時代的な、あるいは地域的な差異も考慮することが必要だと思われる。従来の解釈は、多くの墓で、竪坑のほうに頭を向けて、被葬者が安置されているという考古学的データに由来している。しかしこれは、具体的な埋葬手順を考えると、被葬者の頭を下にして、竪坑を降ろすことは、被葬者への配慮から考えにくい。むしろ足先から入れるのは、当然のことのように思われる。もちろん内部で、遺体の向きを変えられる空間があっても、入り口に頭を向けていれば、従来の解釈も成り立つだろう。しかし、エツァトラン（Etzatlan）のサン・セバスティアン（San Sebastian）遺跡の 1 号墓は、複数の遺体が、墓室の中央に足をそろえる形で配置されている。墓室の入り口から離れて置かれている被葬者は、2 体とも足を入り口に向けている。これはどのように解釈すればよいのだろうか。また、複数の墓室が一つの竪坑を共有する場合は、子宮を模ったものといえるのだろうか。対称的に、あるいは基本方位を意識して作られた複数の墓室は、はたして子宮や産道を重視しているのであろうか。

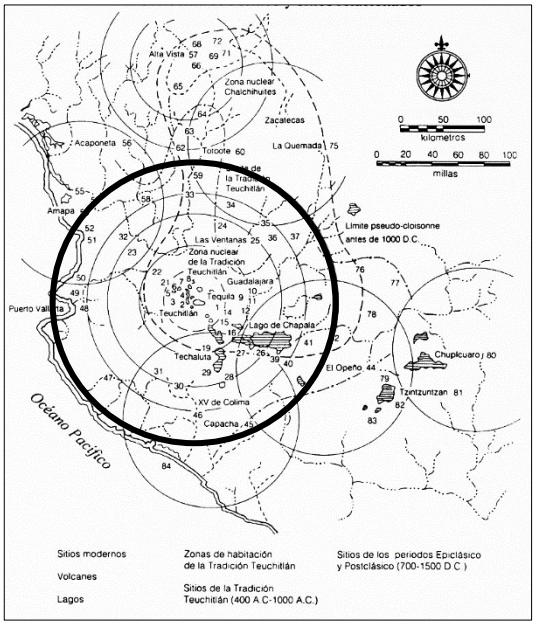
おなじく竪坑が短くつぼ型の竪坑墓と長い竪坑をもち複数の墓室を持つものを同一に解釈することは、むしろ困難であろう。さらに竪坑墓が建造物と関連し、その内部に作られる場合と、竪坑墓が集まって墓域を構成する場合をくらべても、当時の人々は何らかの異なる象徴性を墓に与えていたのではないだろうか。竪坑墓の特徴に応じた解釈や、地域や時代で異なる社会状況に合わせた解釈が求められるはずである。

現在竪坑墓に関するデータが徐々にではあるが増加する中で、一括してその象徴性を語るよりは、データに即して象徴性を理解すべきだろう。地上の構造物とのつながりをもつ竪坑墓に絞って、新たな解釈の可能性を探ることとする。後述するが、同心円状の建造物群と関連する竪坑墓の主な特徴は、数ある竪坑墓の中でも、竪坑が深いことと、副葬品の多さであり、遺跡の指導者的存在か、その家系の人物が埋葬されたことである。

2. テウチトラン伝統と竪坑墓

2.1 テウチトラン伝統

最近の調査により、竪坑墓に関わる新たなコンテクストが確認されている。それは、ウェイガン(Phil C. Weigand)によって提唱されたテウチトラン伝統(Tradición Teuchitlán)で、メキシコ西部地域に特有な建築プランとされ、前 350 年から後 350/400 年にかけて現れる [18]（地図２）。円形ピラミッドを擁するテウチトラン伝統の遺跡は、中心の円形構造物を取り囲むように同心円状に長方形基壇が配置され、中心のピラミッドとそれを囲む建造物群の間に環状の広場が構成される建築複合である。円形基壇を取り囲む複数の長方形建造物は、原則偶数個であり、四つないし八つの例がよく見られる [19]。ロペス(Lorenza López Mestas Cabreros)とラモス(Jorge Ramos de la Vega)は、これを十字型（Cruciforme）の配置としている [20]。



地図２メキシコ西部のテウチトラン伝統の分布（Weigand 1996、Fig.1 より引用）

ほぼテキーラ山を中心に、北はサカテカス州、西はナジャリ州、南はハリスコ州南部まで広範囲に分布している [21]。この伝統の代表的な遺跡としては、テウチトランのグァチモントン(Guachimonton)複合遺跡があげられる（図 3）[22]。この遺跡は 1999 年以降の発掘調査によって、その様相が明らかになってきた。伝統的な建造物のレイアウトは、長方形をした複数の建造物と、中庭と円形の階段状祭壇（ピラミッド）の

三つの要素で構成されている[23]。

この建築複合は、テウチトランでは複数確認されているが、ウェイガンらによって調査された二番目に基底部が大きい円形建造物群（通称La Iguana）の保存状態がよい。円形建造物の数期にわたる拡張で、より小さな円形建造物が内部に埋まっていたことが確認されており、その上部中央には、柱穴が存在していた[24]。ボラドール(Volador)の儀礼を行うための柱を立てた柱穴と考えられ、遺跡博物館の壁画にもその様子が再現されている（写真3)。

写真3 ワチモントン遺跡復元壁画

テウチトラン伝統は、建築プランとうだけではなく、次の四つの文化的特徴が認められるとし、ブランコ(Erika Blanco M.)は、簡潔にまとめている[25]。1)テキーラ山は黒曜石の産地であり、黒曜石鉱床の埋蔵量は世界でも有数で、多数の鉱床が確認されており[26]、テウチトラン伝統を持つ社会は、黒曜石などの資源に特化した社会であった。2)球戯場と柱を使用したボラドールのようなメソアメリカに特有の儀礼もその文化的な特徴となっている[27]。3)ある程度規格化の進んだ器壁の薄い土器にはカオリンが使用されており、オコナワ白地赤彩(Oconahua rojo sobre blanco)、アワルルコクリーム色地赤彩(Ahualuluco rojo sobre crema)土器が知られている[28]。また、4)チナンパ(chinampa)[29]と呼ばれる技術を使った農耕システムなどもその特徴とされている[30]。このような特徴から、価値の高いものを支配し、独占的に交易をおこない、一方では集約的農耕によって統合度の高い社会が営まれていたことが理解できよう。

テウチトラン伝統は、ハリスコ州の州都の位置するアテマハック盆地やコリマ地域などを含む文化伝統と考えられており、竪坑墓の分布範囲をおよそ包含している。ウェイガンはテウチトラン伝統の遺跡としてグァチモントン遺跡の他に、メキシコ西部地域のウィツィラパのセロ・デ・ナバハス遺跡（Cerro de las Navajas)、コルタセナ（Cortacena）のシルクロ・デ・ロマ・アルタ遺跡（Circulo de Loma Alta)、エル・アレナル市のサンタ・キテリア（Santa Quiteria）のコンプレッホ・ランチョ・ヌエボ複合遺跡（Complejo Rancho Nuevo)、メサ・アルタ(Masa Alta)、タラ市のサンタ・マリア・デ・ラス・ナバハス（Santa Maria de las Navajas）などを挙げて

いる[31]。

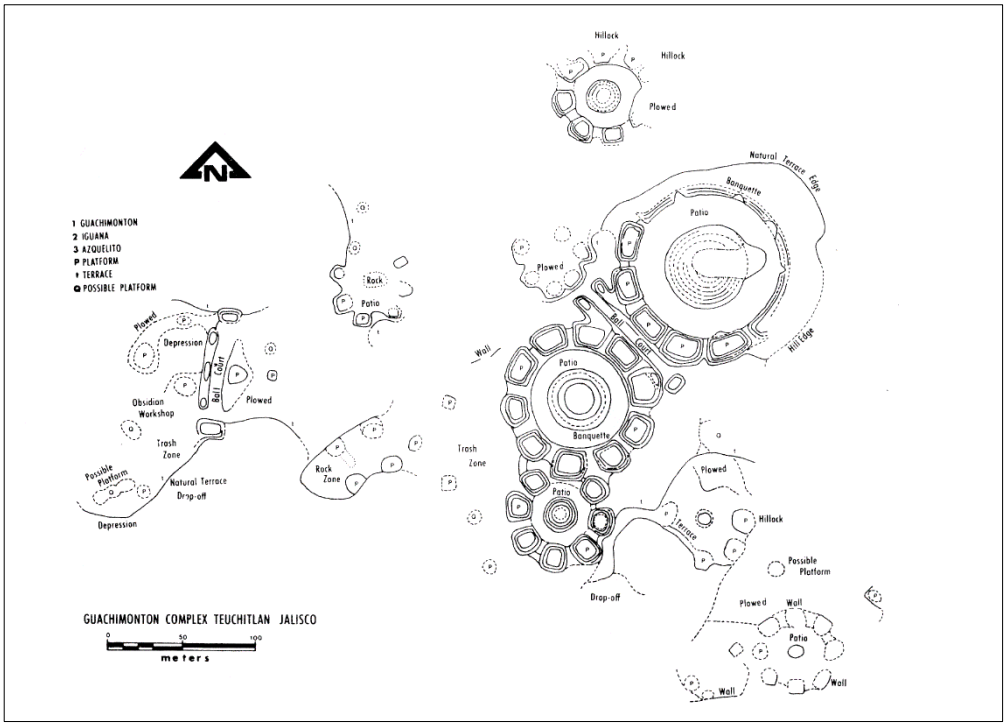


図 3　ワチモントン複合（Weigand 1985 Figure 2.11 より引用）

このような例から比較的長い竪坑を持つ墓が、意図して同心円状のプランを持つ建造物群と関連して作られていることが、判明している。つまり、この建造物群と関連する竪坑墓は、従来の一般的な竪坑墓に関する解釈とは異なった意味が与えられていることは、容易に理解できよう。そこで、竪坑墓を建造物群と関連させて、遺構全体から捉えなおし、墓に与えられた新たな象徴性あるいは死生観を理解する必要があろう。

2.2 竪坑墓と同心円状プランをもつ建造物群との関連

竪坑墓と建造物の関連を以下、具体的に見ていきたい。ここでは代表的な例を挙げることとする。まず、エツァトラン地区のサン・セバスティアン（San Sebastian）遺跡では、ロングが 1960 年代に調査を行い、トゥンバ・デ・ティロを報告している[32]（図 2-18）。墓は人工マウンドの下から見つかっている。このトウンバ・デ・ティロは、墓室が一つで、トンネルで竪坑とつながっている。竪坑の断面は方形で、トンネルも方形である。墓室内の高さは 170cm と高く、天井部は中央部が一番高く弧を

描いている。墓室内には9体の成人が埋葬されていて、うち6体の性別が確認され5体が女性、1体が男性であった。被葬者は墓室の中央に足が集まり、放射状に置かれている。9体のうち、頭蓋変形がなされているものも確認されており、当時の社会において、高い地位を占める人物あるいは、その家系の人々が埋葬されていたことが伺える。

ウィツィラパ遺跡も同様に、テウチトラン伝統に属する遺跡である(図1)。竪坑墓は遺跡の西の建築複合のマウンド下から発見された。この地区は壁で囲まれており、区域内への立ち入りが制限されていた。遺跡内には墓地があるため、高位の人物が埋葬された区域であったことが想像される。それを裏付けるかのように極めて多くの装飾品、土器や中空の人物象形土器が副葬されていた。なかにはカリブ海に生息するホラ貝もみられ、形成期[33]の交易網の広さを物語っている。竪穴は方形で深さは7.6m、穴の底部から直接南と北の 2 つの墓室に出られるような構造をしている。北の墓室は南の墓室よりもわずかに大きく、本葬された男性の遺体をみることができる。この被葬者の他に2体埋葬されていたが、1体は30歳から40歳代の男性、もう1体は50歳代の女性であった。南の墓室には男性が1体、女性が2体の計3体が埋葬されていた。6体とも仰臥位伸展葬で、頭を竪穴の方に向け、足先を墓室奥に向けている。いずれの墓室においても、遺骸は南北軸に沿ってほぼ平行に配置されていた。調査を行ったロペスらはこれらの遺体が親族同士であると推論している[34]。

上記のほかにサン・アンドレス遺跡でも約14.5mの竪坑をもつトゥンバ・デ・ティロが確認されている。この竪坑墓の入り口も、地表面では同心円状に配された10×15mの長方形の基壇のひとつに覆われていた[35]。

いずれの例からもわかるように、比較的長い竪坑墓を持つ墓が意図して同心円状のプランを持つ建造物群と関連して作られていることが、判明している。つまり、これらの建造物群を使用していた社会では、リーダーやその出自の人物が中心となり、社会を統治している様子が垣間見える。このような社会状況から、長い竪坑をもつ墓が意図的に作られ、主要建造物群と結び付けられて、埋葬が行われていたことは確かであろう。それでは、長い竪坑を有する竪坑墓は、いかなる象徴性を与えられて、建造物群の中に作られたのだろうか。

3. 同心円状の基壇群とボラドーレス

3.1 土製模型とボラドール

同心円状に配された建造物群と中心の円形ピラミッド、さらにそれらで構成される環状広場は、どのように使用されたのであろうか。グァチモントン遺跡の円形ピラミッド上部中央からは、前述のとおり柱穴が発見されており、すでにこの使用法について、ビークマン（Christopher S. Beekman）らが解釈を示している[36]。手がかりは、ナジャリ州の竪坑墓から出土する同時期の模型土器に再現された人々の生活描写にある（図 4、5、6）[37]。その一つとして、テウチトラン伝統の要素として挙げられている球戯の場面も模型として作られている[38]。そこには、長方形の球戯場のコートとコートを囲む側壁が象られ、球戯者や観戦者たちまでも表現されている。

さらにナジャリ州からは、家屋または神殿と思われる建造物の土製の模型が出土している。イシュトラン・デル・リオ(Ixtlan del Rio)様式の土器で、イェール大学アート・ギャラリーの素焼きの土製品（写真４）にも、複数の建造物を含む模型がある[39]。ここでは、円形の台座の四方に、広場を囲むように配された四つの建造物が観察できる。また、環状広場で人々が躍る様子も作られている。さらに、広場に柱を立てて、儀式を行っている場面も象られている。広場の中央に、建造物の倍ほどの高さのある柱の上で、スペイン語で飛ぶ人を意味するボラドールが一人、先のとがった帽子をかぶり、飛ぶように両手を広げて、アクロバティックな姿で表現されている。広場の下には円錐形のとんがり帽子をかぶる人物たちも配されている。フルート、ほら貝、ガラガラ、縦置きの太鼓などが表現され、演奏していることを示している。

写真 4 ボラドールの土製模型
(Iturbide 2013, p.16, Imagen 11 より引用)

写真 5 円形基壇の土製模型

また、シカゴ美術館所蔵の「儀礼センターを表現した模型」（写真５）では、テウ

チトラン伝統の建造物が、模型として象られている。やはり円形の台の上の四方に建造物が配されている。台座の中央で、四つの建造物の中心に、円形の階段状ピラミッドが見て取れる。この模型も同心円状のプランを持っている。埋葬文化の研究者エルナンデスによれば、その円形の階段状ピラミッドの頂上には、仮面あるいは大きな頭飾りを付けた人物が立ち、「明らかに世界軸（axis mundi）の特徴を示す権威の杖」をもっている[40]。

またファーストは、ナジャリ州とハリスコ州の間の地域に由来するとされる素焼きの土製の模型（写真６）について、解説を行っている[41]。その模型には、円盤状のプレートの上に寄棟式というより角錐状の屋根の建造物と、切妻式の屋根の建造物が各一対、四方に配されている。プレートの中心には一本の木が立っていて、４棟の建造物と中心の木を結ぶと十字型になるように配置されている。木の周囲では人々が日常の生活を営んでいる。木の枝は、ほぼその先端部分から伸びる４本と柱の中ほどから伸びる４本の計８本が見て取れる。いずれの枝もＴ字型をしており、どの枝にも鳥がとまっている。また、柱の先端には、ワシと思われる他の鳥よりも一際大きな鳥がとまっている。ファーストは、これを天界の四方位と地上の四方位の間の関係を表していると考えている。また、世界の中心に立つ偉大な世界樹つまり世界軸（axis mundi）として捉えている。その世界樹の根は、地下世界に伸び、鳥で覆われた天に茂る枝は、基本四方位を示している。

写真６ 世界樹の土製模型

このように見てくると、研究者たちが指摘してきたように、同心円状の基壇群では、柱が建てられボラドールの儀礼が行われていたことが容易に理解できる。言い換えれば、円形ピラミッドでは、世界軸と関連する柱を使用した儀礼が行われていた可能性はきわめて高い。

3.2 現在も続くボラドーレスの踊りとその象徴性

イシュトラン・デル・リオ様式の素焼きの土製品に表現されるボラドールの儀式とはどのようなものだったのだろうか。2009 年にユネスコの無形文化遺産に登録された現代のダンサ・デ・ボラドーレス（Danza de Voladores）という儀式が、形成期の

儀式の象徴性を探る大きな手掛かりとなっている。ダンサ・デ・ボラドーレスというスペイン語の名称で一般的には知られているが、ナワトル語では、「ワシの姿でバランスをとる人」を意味するクアウフパトランキ（cuauhpatlanqui）[42]という。

1938 年にサン・ルイス・ポトシ州のワステカ人によって再興されたダンサ・デ・ロス・ボラドーレスでは、儀礼の前に性的な禁欲と断食を行い、前夜にダンスを踊り、神々と祖先へ供物が捧げられる。儀礼の際、事故があるとこれらの事前準備に不備があり、タブーを破ったものがいると考えられた。儀礼は、ある日の朝、儀礼の後にポールとなる木を伐りに行くところから始まる。この儀式は音楽を伴い行われ、町の広場まで木が曳かれていき、先端部に 5 本の綱が付けられる。これらの綱 4 本は、4 人の踊り手が降りるためのもので、そのうち一本は、柱に巻きつけ、梯子の働きをする。

柱は、綱で引かれ手や叉木で起こされ、広場に掘られた穴に立てられる。この際には、ひよこが一羽、供物として穴に入れられる。立てられた柱の周りには、柱がぐらつかないように杭が打ち込まれる。先端部には、木の幹をくりぬいて作った回転する筒状の部品を取り付ける。さらに、正方形の木枠をこの回転部分にロープで固定する。この正方形の木枠は、4 人のボラドールが座ることになる。この木枠には、木の枝が取り付けられる。さらに回転部分を回しながら 4 本のロープを柱に巻きつけていくことで、準備が整う。基本四方位と結びつき象徴的に世界の中心が現されているのである。ボラドーレスの研究者であるストレッサー＝ペアン（Stresser-Pean）は、四人で回るタイプよりも、二人が降りてくるタイプが古いとしている。このことからメキシコ西部の土製品に表現された柱には、1 人が頂上部分で舞っているので、より原始的なボラドールを表現しているの可能性もあろう。

3.3 絵文書に現れる柱の儀礼と神話

さらに時代を遡り、同じメソアメリカで栄えたアステカ文明の柱と世界樹に関する観念を参照しておきたい。アステカの一年は一ヶ月 20 日で構成される 18 ヶ月と不吉な日とされる最後の 5 日間ネモンテミをあわせ、365 日の暦が存在していたが、その各月には、祭礼が行われていた。

先住民への聞き取りを行いアステカについて詳細な記録を残した宣教師のサアグン(Bernardino

de Sahagún)によれば、第 10 番目の月のショコトル・ウェツィ（Xocotol Huetzi 果実が落ちる）には、火の神シウテクートリ(Xiutecuhtli)[43]、別名イシュコサウフキ(Ixcozauhqui)のための祭りで、木の柱が登場する [44](図 4)。ショコトル・ウェツィの前の月に人々は、山で約 40m もの大木を切り出し、シウテクートリ神殿の中庭まで引きずって運んでくる。人々は枝を切り払って、柱を立てそのままおいておく。祭りの前日には、柱を注意深く横にし、樹皮を剥いで、磨き上げ、上部に紙の飾りや綱が巻きつけられ、再び立てられる。その後、捕虜が生贄としえ、火中に投げ入れられる。サアグンは、木の先端には何本もの綱が巻かれており、船のマストから索具がぶら下がっているようであったと述べている。木の上部に、ツォアリ(tzoali)という練り粉でできたシウテクートリの像が置かれていた。

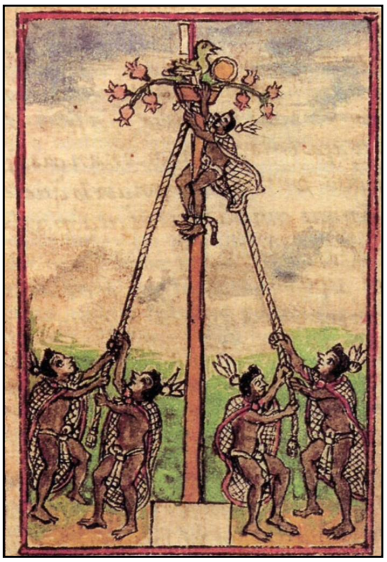


図 5 ショコトル・ウェツィの祭り
(Durán 1967,Lamina18)

また、16 世紀のドミニコ会修道士ドゥラン（Diego Durán）は、ボラドールの祭りについて記述している [45](図 5)。彼は、ボラドールと呼んでいるが、その記述から使用する柱のことを示していることは間違いない。やや長くなるが重要な箇所なので、原文のまま引用する。

「彼らは高いボラドールのまわりで、鳥の衣装をつけ、また、ときにはサルの衣装をまとって踊る習慣があった。ボラドールのてっぺんから飛んで、柱の先端に巻きつけられた綱がほどけてくる。この柱の先端に巻きつけた二、三本の綱に身をまかせ、柱の上部に設けられた木枠のところで徐々にほどける。木枠には何人か腰掛け、また何人かは回転する支柱の先端の大きな乳鉢状の部分に座っている。その先端部分と木枠が四本の綱で結わえられていた。木枠が回転するにつれて、四人は（回りながら）降りていった。座っているものは、ときどきラッパを吹きながら、勇敢で器用なことを示した。」[46]

さらにドゥランは、この祭りがミクカイルウィトントリ（miccailhuitontli 死者の祭）と呼ばれていたことを記している [47]。

サアグンの記述から柱の儀礼は暦や時間を司る火の神シウテクートリにささげられた祭りであることがわかる。サアグンとドゥランによって示された共通点は、柱の先端にロープが結ばれていたことである。さらにドゥランの記述から、4 人がロープを徐々に伸ばして、柱の先端から回りながら下降してくることが理解できる。この際、鳥やサルの衣装をまとうとあるが、アステカでは、鳥やサルは滅んでしまった世界にかつて住んでいた人間であると創世神話に記されている。

16 世紀の記録「絵によるメキシコ人の歴史」の第 5 章[48]には、創世神話が記されており、これまで滅びた四つの太陽つまり時代と第 5 の太陽と世界の創造が描かれている。二番目の時代の人間は、世界が終わる際にサルに変えられ、三番目の雨の神トラロック(Tlaloc)の時代には、火の雨が降り、人間は鳥に変えられている。第 4 の世界は、洪水で滅び、人間は魚に変えられた。アステカの人々が暮らす時代は、第 5 の時代で、今の人間は死者の骨に神が血をかけて生まれたとされている。死者も含めショコトル・ウェツィの儀礼で表現されているのは、まさにアステカの創世神話に登場するかつて姿を変えられた人間たちである。「死者の祭り」とされる柱の儀礼では、まさに創世神話に関する伝説上の死者あるいはかつての人間が表現され、創世神話を想起させる儀礼と捉えることもできる。

第 4 番目の太陽で、雨の神トラロックの妻、チャルリウトリクエ(Chalchiutlicue)の太陽の時、大雨が降り天が落ちてしまったが、その時ケツァルコアトルとテスカトリポカは大きな木に姿を変えて、他の 2 神と 4 人の男の手助けを得て、天のすべてのものと星とともに、天を本来の場所に戻したとされている。これは、第五の世界の創造であるが、この際ケツァルコアトルはケツァルウェショトル(quetzalhuexotl)と呼ばれる「見事な柳」「羽毛の生えた柳」に姿を変え、テスカトリポカはテスカクアウィトル(tezcacuahuitl)という「鏡の木」になり、天を持ち上げている。

この神話からは、アステカの世界観では世界の中心に世界樹があることが確認でき、そこにはかつての人間が表現されていることが読み取れる。同じ先スペイン期のメキシコ西部にこれらの世界樹の観念を適用することは、あながち見当違いではないであろう。さらに、アステカでは柱を使用した祭が存在し、ダンサ・デ・ボラドーレスが行われていたことからも、柱とダンサ・デ・ボラドーレスが関連していることを示している。

4. テウチトラン伝統と関連する竪坑墓の象徴性

死に際し、世界の構造や成り立ち、つまり世界観を確認する形で、埋葬が行われることは、他の文化で見られるものであり、先スペイン期のメキシコ西部で行われていたとしても何の不思議もない。むしろこのように解釈することで、人間の創造譚や、世界を生み出す世界樹信仰が、象徴的に埋葬空間に表現されていたと考えることは、より自然なことではないだろうか。『世界樹木神話』を著したジャック・ブロス（Jacques Brosse）は、次のように述べている。「遠い昔、人間が地上に姿を現すはるか以前に、一本の巨大な樹木が天までそびえていた。宇宙の軸であるこの樹は三つの世界を貫いている。その根は、地下の深遠まで伸び、枝は天の最上層に達する（傍点筆者）」[49]と。やはり世界樹は、メキシコ西部地域でも、天上界と地上界、さらには地下界を貫く世界軸であったのだろう。テウチトラン伝統の場合、竪坑墓は、地上界と地下界言い換えれば死者の世界をつなぐ軸としての役割が与えたれたのだろう。

子宮や産道として竪坑墓を解釈することも、これまで同様可能であろうが、テウチトラン伝統と関連する竪坑墓は、柱に関する信仰と結びつき、これまでとは異なる世界観にもとづいて墓の構造が捉えなおされて、竪坑墓に新たな象徴的意味が付与されたと考えられる。その意味とは世界軸であり、世界樹の信仰に基づく埋葬である。世界の中心が意識され、地上から地下に伸びるしっかりとした軸を重視し、また基本方位が重視される。その一方で竪坑墓は、これまでの女性の生殖器官の形状を軽視した形をとり、埋葬される遺体の配置も必ずしも頭を入り口に向けないようになったと推察される。アステカの祭りを西部地域に敷衍してみると、そこには世界の創造、さらには人間の誕生にかかわる物語が象徴的に表現されていた可能性もうかがえる。また、アステカのショコトル・ウェツィの祭りがシウテクートリを祀っている点は、意味深長である。世界樹は世界観のうち空間観や空間の創造に関連するものと思われる。一方、シウテクートリは時間を司っており、暦の神であり、火の神である点から、アステカのシウモルピリ(Xiuhmolpilli)[50]という時間の更新の儀礼を想起させる。竪坑墓が火山の周囲に分布していることは、シウテクートリ神の信仰と関連すると考えられなくもないが、この関連については今後の研究課題としたい。

先住民の儀礼研究を行っているウルシド(Javier Urcid)は、紀元前600年から2500年続く伝統として、ダンサ・デ・ボラドーレスについて述べ、その柱は、天と大地の間で媒介する世界軸ということを思い起こさせるだけでなく、建築複合の中心に位置し祖先にささげられた場所に選定されてもいるという見解を示している[51]。メキシコ西部で表現される柱が、世界軸として天と地上をつなぐことは、ウルシドによっても述べられており、さらに死者とのつながりを示しているウルシドの意見には賛

同できる。しかし、世界軸を天界と地上にとどめていることは、世界軸の本来の意味が生かされていない。世界軸は、ブロスが述べているように、メキシコ西部の地域でも、天上界と地上界、さらには地下界を貫く軸だったのではないだろうか。天上界と地上界は、ボラドーレスの柱で、貫かれており、柱は中心性を示すごとく、テウチトラン伝統の中央円形基壇に立てられていた。つまり、テウチトラン伝統の社会では、この円形階段状ピラミッドを中心にした儀礼が行なわれ、さらにそれを取り囲む広場では、ボラドールの儀礼を見るために多くに人々が集ったことは、容易に想像できよう。また、儀式を司る人物たちは、首長やシャーマンなのか今のところ判断はつきかねるが、もちろん社会の中心的人物で、リーダー的存在であったことは間違いあるまい。このように理解できるならば、この柱は社会の中心性もしくは権威を示すシンボルであったとも解釈できよう。テウチトラン伝統では、より統合度の高い複雑な社会が営まれており、社会のリーダーの権威も一段と強くなったことはみてきたが、彼らが、従来の世界観を新しい世界観に作り替えた可能性が指摘できよう。埋葬で言えば、墓が大地母神との関係から女性の生殖器官を模して造られる価値観に変更を加え、アステカの創世神話にも登場する世界樹あるいは世界軸という世界の中心を示すシンボルや基本方位を導入し、時空間の支配を確立させたのではないだろうか。竪坑墓のコンテクストからは、明確に時間観の変化を見て取ることはできないが、墓と関連する構造物で行われていたボラドールの儀式は、その可能性を示している。

さて、ボラドールの儀礼を主催したと思われる人物たちは、これまで見てきたように、同心円状に配置された基壇下の竪坑墓に埋葬されていた。これは、竪坑墓の特徴で述べたように、特定の家系の人々を集団で埋葬する機能を果たしていたことになる。さらに、一般的にテウチトラン伝統の竪坑は、その他の竪坑墓のものと比較した場合、深さの違いは明白である。これは、円形構造物群で中心的な役割を果たした人物が、死後の地上界でもその家系を重視し、中心的な役割を果たすために、地上と地下を結ぶ世界軸つまり長く立派な軸である竪坑を必要としていたのだろう。また各遺跡で、象徴的な中心軸である柱が立てられ、実際には複数の中心軸が存在していたのである。このことから、複数の竪坑が基壇と関連し、各親族集団を埋葬するために作られたとしても、なんら不思議ではない。柱である世界樹が大地の中心を象徴し、地下界の中心を竪坑が象徴していたと考えられよう。

おわりに

メキシコ西部の竪坑墓に関する資料が増加する中、従来の竪坑墓の解釈では理解が困難なケースが生じていることを受け、本稿では、墓の形態的特徴に応じて、墓を地上の遺構と関連づけて捉え、埋葬文化に関する新たな解釈の可能性を示そうと試みた。

まず竪坑墓の基本的特徴に触れ、分布や形状についてかなりの多様性があることが確認された。さらに、個人墓や集合墓など異なる利用方法についても触れ、集合墓の場合は親族集団による再利用が行われていたことなどが示された。また具体例を挙げ、竪坑墓が墓地的空間をつくり出している場合が多いことも見てきた。ついで、竪坑墓に関する従来の文化的解釈を辿ると、50 年代 60 年代までの限られた資料から「竪坑墓は女性の生殖器官を象徴する」とフエンテらが解釈を提示していることがわかり、その解釈が現在も一般的に受け入れられていた。しかしながら、形態的にも多様な竪坑墓は、女性の生殖器官を象徴するという解釈だけでは不十分であることは明白である。地域や時代によって異なる社会状況を考慮して、再解釈がなされるべきであろう。

そこで筆者は、同心円状に配された建造物群と意図して関連づけられた、比較的長い竪坑を持つ墓に焦点を絞って、竪坑墓に与えられた新たな象徴性あるいは死生観を解明しようと試みた。なぜなら、テウチトラン伝統と呼ばれる建造物群は、1990 年代以降に本格的に発掘が進んだ遺構だからである。テウチトラン伝統の遺跡では、黒曜石など価値の高いものを支配し、独占的に交易をおこない、さらに集約的農耕によって統合度の高い社会が営まれており、社会の階層化も進んでいたものと思われる。これは、副葬品の多寡からも容易に理解できよう。社会の中心に位置する同心円状の基壇群では、中央基壇に柱が建てられボラドールの儀礼、つまり世界軸と関連する柱を使用した儀礼が行われていた。

現代のダンサ・デ・ボラドーレスおよびアステカのショコトル・ウェツィの祭りと創世神話を参考に、柱の象徴性を紐解くと、柱は世界樹と関連し、世界の創造や世界の中心と関連するものであることがみえてきた。さらに、儀礼ではかつての人間が表現されており、創世神話が織りなされる儀礼であることが推し量られた。地域は異なるが、同じ先スペイン期のメキシコ西部にこれらの世界樹あるいは世界軸の観念があったと結論付けることは、メキシコ西部の土製品などからみても極めて蓋然性が高いと言えよう。柱の儀礼と関連する建造物群の中に作られた竪坑墓に限って言えば、世界を生み出す世界樹や創世神話が象徴的に示される空間として作られたのだろう。テウチトラン伝統の場合、ブロスの述べるように、竪坑墓は地上界と地下界、

言い換えれば生きる者の世界と死者の世界をつなぐ軸としての役割が与えたれたのだろう。

ボラドーレスの研究を行っているウルシドも、ボラドーレスと祖先とのつながりを示唆しており、筆者が主張する竪坑が世界軸を象徴している可能性を支持する解釈を展開している。しかし、ウルシドが述べるように世界軸は天界と地上を結ぶ柱にとどまることはなく、さらに地上と地下界を貫く軸である明らかである。

竪坑墓と地上の建造物群は偶然関連付けられたわけではなく、社会のリーダーが世界樹または世界軸の観念を意識して使用し、世界観の支配を具体的に遺跡に表現したものと言えるだろう。世界観の表現として、地上には柱を立てる円形の階段状基壇を作り、遺跡内部の地下には竪坑墓を配置した。地上から伸び天界と地上を結ぶ柱と、地上と地下界を結ぶ竪坑が、その表現で最も重視されたと考えてよかろう。テウチトラン伝統の社会は、以前の社会より統合度が増し、社会の中心性がより意識された凝集性の高い社会となっており、リーダーたちが墓の差別化を行ったことが伺える。言い換えれば、竪坑墓を含む大地に対し、生命を育む女性のイメージをあてて豊穣と関連する価値観を重視していた世界観から、世界の中心と関連する世界軸を意識した世界観へ変化したことを、社会の権力者は遺跡に投影し始めたといえよう。この世界観の変化が一部の竪坑墓の形態を変化させ、テウチトラン伝統の建造物と関連する竪坑墓に新たな象徴性を与えたものと考えられよう。

※本稿は、科研費助成（課題番号 26300034）をうけて実施された調査成果を含むものです。

参考文献

Anawalt, Patricia R.

1998 “They come to trade exquisite things an ancient West Mexican-Ecuadorian contact”. In *Ancient West Mexico：an known past* ed. Richard F. Townsend, pp.233-249, The Art of Institute of Chicago

Baus Czitrom, Carolyn

1998 *Los Perros de la Antigua Provincia de Colima*, Instituto Nacional de Antropología e Historia, Colección Obra Diversa, México

Beekman, Christopher S.

2005 “Nuevos enfoques acerca de la Tradición Teuchitlán, Investigaciones actuales en Llano Grande y Navajas, Jalisco”. En *El antiguo occidente de México, Nuevas perspectivas sobre el pasado prehispánico*, editado por Eduardo Williams et al., pp.73-91, El Colegio de Michoacán.

ベサニーリャ，クララ(横山玲子訳)

2011 『アステカ・マヤの神々』、大英博物館双書 IV、古代の神と王の小事典３、學藝書林。

Blanco Morales, Erika

2013 "El sitio arqueológico Guachimontones". In *Centro interpretativo Guachimontones*, pp.19-27, Gobierno del Estado de Jalisco.

ブロス、ジャック

1995 『世界樹木神話』、八坂書房。

Corona Núñez, José

1954 “Diferentes tipos de Tumbas prehispánicas en Nayarit”. *Yan,* 3, pp.46-50. Centro de Investigaciones Antropológicas de México, México.

1955 *Tumba de El Arenal, Etzatlán, Jalisco*, Informe 3, Instituto Nacional de Antropología e Historia, Dirección de Monumentos Prehispánicos, México.

Disselhoff, H.

1932 “Note sur le résultat de quelques fouilles archéologiques faites a Colima”. *Revista del Instituto de Etnología de la Universidad Nacional de Tucumán*, no.2, pp. 525-538.

1960 “Notizen zur Archäologie Westmexicos”, *Ethnologica* 2, pp.542-547.

Durán, Diego,

1984 *Historia de Las Indeias de Nueva España e islas de la tierra firme*, Editorial Porrúa, México.

ドゥラン、ディエゴ（青木康征訳）

1995 『神々とのたたかい II』、アンソロジー 新世界の挑戦 10、岩波書店。

Esparza, Rodrigo López

2008 “Los yacimientos de obsidiana de El Pedernal – La Mora, Una explotación constante durante el desarrollo de la Tradición Teuchitlán”. En *Tradición Teuchitlán*, editado por Phil C. Weigand Christopher Beekman y Rodrigo Esparza, pp.143-166, El Colegio de Michoacán y Secretaría de Cultura del Estado de Jalisco.

Fuente, Beatriz de la

1994(1974) *Arte Prehispánico Funerario*, El Colegio Nacional, México.

Furst, Peter. T.

1965 "Radiocarbon dates from a Tomb in Mexico". *Science*, 147(3658), pp.612-613.

1966 "Shaft Tombs, shell Trumpets, and shamanism: a culture-historical approach to problems in West Mexico", University of California, Los Angeles.

1973 "West Mexican Art: Secular or Sacred?". In *The Iconography of Middle American Sculpture*, ed. Dudley t. Easby, Jr.. New York: The Metropolitan Museum of Art.

Galván Villegas, Luis Javier

1991 *Las Tumbas de Tiro del Valle de Atemajac, Jalisco*, Colección Cientifica, Serie Arqueología, Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Garibay K., Angel Ma.

2005 *Teogonía e historia de los mexicanos, tres opúsculos del siglo XVI.* Editorial Porrúa México.

Hernández Díaz, Verónica

2013 "Muerte y vida en la cultura de tumbas de tiro". En *Miradas renovadas al Occidente indígena de México*, coordinado por Marie-Areti Hers, pp.78-132.

Kelly, Isabel

1978 "Seven Colima Tombs: An Interpretation of Ceramic Content". In *Studies in Ancient Mesoamerica*, vol. 3, pp.1-26. University of California.

1980 *Ceramic Sequence in Colima: Capacha an Early Phase*, University of Arizona Press, Tucson.

Long, Stanley V.

1966 "Archaeology of the Municipio of Etzatlan, Jalisco". University of California, Los Angeles.

1967 "Formas y distribución de pozo con cámara lateral". *Razon y fábula* 1, pp.1-15, Universidad de los Andes.

López Mestas Cabreros, Lorenza and Jorge Ramos de la Vega

1994 "Tumba de tiro en Huitzilapa, Jalisco". In *Arqueología Mexicana*, Vol. Ⅱ, Núm. 7, pp.59-61.

1998 "Excavating the Tomb at Huitzilapa", *Ancient West Mexico: Art and Archaeology of the Unknown Past*, edited by Richard F. Townsend, pp.53-69, The Art of Institute of Chicago.

Meighan and Nicholson

1970 “The ceramic mortuary offerings of prehistoric West Mexico: an archaeological perspective”. In *Sculpture in Ancient West Mexico*; Nayarit, Jalisco, Colima, p.17-32, Los Angeles.

Mountjoy Harris, Joseph Bode

2012 *El Pantano y otros sitios del Formativo Medio en el valle de Mascota, Jalisco.* Secretaría de Cultura, Gobierno de Jalisco, Universidad de Guadalajara Centro Universitario de la Costa, y el H. Ayuntamiento de Mascota, Jalisco. Guadalajara, Jalisco.

Oliveros, José Arturo

2004 *Hacedores de tumbas en El Opeño, Jacona, Michoacán*, El Colegio de Michoacán-H. Ayuntamiento de Jacona de Plancarte.

Sahagún, Bernardino de

1999 [1577] *Historia General de las Cosas de Nueva España*, Editorial Porrúa, México.

Smith, Lois and Mitch Tuchman (editors)

1989 *Sculpture in Ancient West Mexico*; Nayarit, Jalisco, Colima, Los Angeles County Museum of Art, Los Angeles.

Schöndube B. y L. Galván

1978 “Salvage archaeology at El Grillo-Tabachines, Zapopan, Jalisco, Mexico”. In *Across the Chichimec Sea*, edited by Riley and Hedrick, pp.144-163, Southern Illinois University.

Schöndube B., Otto, Federico A. Solórzano et al.

1980 *Historia de Jalisco*, *tomo Ⅰ, Desde los tiempos prehistóricos hasta fines del siglo XⅧ*, Gobierno de Jalisco INAH, Guadalajara, Jalisco.

Stresser-Péan, Guy

2005 “El Volador, datos históricos y simbolismo de la danza”, *Arqueología Maxicana*, vol.XII, Núm.75, pp.20-27.

タウンゼント、リチャード・E（増田義郎監修、武井摩利訳）

2004 『図説 アステカ文明』、創元社。

Urcid, Javier

2006 “Antigüedad y distribución de la danza de los Voladores: Águilas que descienden, corazones que ascienden”, *Arqueología Mexicana*, vol. XIV, núm.81, pp.70-74.

Valdez, Francisco

1994 “Tumbas de tiro en Usmajac (Jalisco), una orientación de temática”, en *Trace*, no.25, pp.96-111.

Weigand, Phil C.

1985 “Evidence for Complex Societies during the Western Mesoamerican Classic Period”. In *The Archaeology of West and Northwest Mesoamerica*, edited by Michael S. Foster and Phil C. Weigand, pp.47-91, Westview Press.

1992a “Ehecatl, dios supremo del occidente”. En *Origen y desarrollo de la civilización en el occidente de México*, editado por B. Bohem de Ñameiras, y P. C. Weigand, pp.205-238, El Colegio de Michoacán, Zamora.

1992b “El juego de pelota prehispánico y las canchas de pelota de Jalisco y Nayarit: la tradición de Teuchitlán”. En *El juego de pelota en Mesoamérica*, pp. 237-263, Siglo Veintiuno Editores, México.

1993 *Evolución de una civilización prehispánica; Arqueología de Jalisco, Nayarit, y Zacatecas*. El Colegio de Michoacán, Zamora.

1995 “Evidence for Complex Societies during the Western Mesoamerican Classic Period”. In *The Archaeology of West and Northwest Mesoamerica*, edited by Michael S. Foster and Phil C. Weigand, pp.47-92.

1996 “La evolución y ocaso de un núcleo de civilización: La Tradición Teuchitlán y la arqueología de Jalisco”. In *Las Cuencas del Occidente de México*, editado por Williams y Weigand, pp.185-245, El Colegio de Michoacán, Zamora.

2005 “El juego de pelota monumental de los Guachimontones, Teuchitlán, Jalisco”. En *El antiguo occidente de México. Nuevas perspectivas sobre el pasado prehispánico*, editado por E. Williams, P. Weigand, L. López Mestas y D. García, pp.45-72, El colegio de Michoacán.

吉田晃章

2009 「先スペイン期メソアメリカにおけるイヌの象徴性—中米の世界観に関する一試論—」、『文明研究』27 号、pp. 1-26

【文書資料】

Codex Borbonicus, edited by K. Nowotny, Akademische Druck-u. Verlagsanstalt, Graz, Austria, 1974.

Códice Chimalpopoca: anales de Cuautitlán y leyenda de los soles, traducido and editado por Primo Feliciano Velázquez, Universidad Nacional Autónoma de México-Instituto de Investigaciones Históricas, Mexico City, 1975.

【参照 WEB サイト】

・The Art Institute of Chicago, collections, Indian art of the Americas,
<http://www.artic.edu/aic/collections/artwork/75238>(2017/2/01 閲覧)

・Yale University Art Gallery
<http://artgallery.yale.edu/collections/objects/10009>(2017/2/01 閲覧)
<http://artgallery.yale.edu/collections/objects/ 10950>(2017/2/01 閲覧)

---

[1] Weigand によるとタラ(Tala)村、San Juan de los Arcos に、22m におよぶ竪坑墓が存在すると報告されている(Weigand　1996, p.16)。

[2] この土壌は、多くの水分を含むことができるが、乾燥すると固く締まる。粘土と礫の層で、地味に乏しく、農耕には適さない。

[3] 竪坑墓の副葬品として、犬の象形土器が有名であるが、埋葬における犬の象徴性については、Baus(1998)、吉田(2009)を参照。

[4] ミチョアカン州のエル・オペーニョ遺跡とコリマ州のカパーチャ遺跡にみられる墓を竪坑墓の先行形態と考えると紀元前 15 世紀始め頃まで遡ることができる(Oliveros 2004 ,Kelly 1980)。

[5] サユラ考古学プロジェクト(Proyecto Arqueológico de Cuenca de Sayula)が調査を行なったセロ・デ・アグア・エスコンディード(Cerro de Agua Escondido)の竪坑墓などは、山脈から伸びる緩斜面に位置している(Valdez 1994)。

[6] Meighan and Nicholson 1970, p.8, p.22.

[7] Schöndube 1980, p.174, Mapa 参照。最近は、Anawalt (1998)や Mountjoy (2012)らが、南米との関係について論じている。トゥンバ・デ・ティロの型と、地理的分布などの研究はコリマ地方では Dissellhoff(1932, 1960)、ナジャリ地方では Corona (1954)、メキシコ西部と南アメリカの墓室の研究は Long (1967) よって研究が行われている。

[8] Corona 1955.

[9] 4 体以上埋葬されている竪坑墓は、no.2, 3 など複数報告されている（Galván 1991)。

[10] Schöndube y Galván 1978, pp.154-156.

[11] Kelly 1978, pp.5-11.

[12] 例えば、コリマ州 El Manchón 遺跡など(Kelly 1978)。

[13] Kelly 1978.

[14] Furst 1966, p.289.

[15] Fuente 1994(1974) p.19.

[16] 原文は以下の通り。”Probablemente el simbolismo de esta construcción mortuoria haya reproducido las condiciones del nacimiento, para renacer en la vida después de la muerte; así, el tiro y la cámara estarían inspirados en el aparato reproductor de la mujer.”メキシコ国立人類学博物館、西部展示室、解説パネルより(2015 年 3 月 19 日訪問)。

[17] この解釈は、象形土器で男性器が、強調されて製作されることからも、理解できよう（例えばコリマ州出土の象形土器 no.111 や no.112(Smith and Tuchman, 1989, p.131）など。

[18] Weigand 1985, 1996.
[19] エル・アレナル遺跡やサンタ・キテリア(Santa Quiteria)遺跡、ウィツィラパ遺跡などは４つの建造物が中央の建造物を囲み、サンタ・マリア旧アシエンダ(Ex-hacienda Santa Maria)遺跡などは８つの建造物が取り囲んでいる。
[20] López y Ramos 1998, p.16.
[21] Weigand 1985.
[22] Weigand 1993,1995,1996 など参照。グァチモントン遺跡は、「リュウゼツラン景観と古代テキーラ産業施設群(Agave Landscape and Ancient Industrial Facilities of Tequila)」の名称で、遺跡の例外的な価値によりその中核地域の一つとして 2006 年に世界文化遺産に登録されている。
[23] Weigand 1993.
[24] Beekman 2005, p.84, Fig5.また、円形建造物（通称 La Iguana）の遺跡内の解説パネルには、「グァチモントンまたは中庭を囲む 10 基の長方形基壇と中央の円形祭壇で構成される、より保存状態のよい円形複合である。5 期の建築期は、ボラドールの儀礼を行っていたことを証明する中央ポールが立っていた跡を提示している。」と記され、複数の建築期があり、円形階段状ピラミッドが埋められ、拡張されたことが図示されている。以下、スペイン語原文。Guachimonton o conjunto circular mejor conservado con 10 plataformas rectangulares alrededor de un patio y un altar central circular. Las cinco etapas constructivas presentan huellas de poste central que evidencian la práctica ritual del volador.
[25] Blanco 2013, p.21.
[26] Esparza は、グァチモントン周辺で 200 以上もの黒曜石の鉱床を登録している(Esparza 2008, pp.150-156)。
[27] テウチトラン伝統と球戯場の関係については、Weigand 1992b, 2005 を、また、ボラドールについては、Weigand 1992a, pp.211-224 を参照。
[28] Weigand 1996, p. 211.
[29] 湖沼地帯の畔を埋め立て成形した碁盤目状の畑で、畑と畑の間には水路が通っている。
[30] Weigand 1993.
[31] Weigand 1996.
[32] Long 1966.
[33] メキシコ西部地域では前 1500-前 200 年。
[34] López and Ramos 1994, 1998.
[35] Blanco 2013, P.21, Imagen 6 参照.
[36] Beekman 2005, p.84, Fig5.
[37] 写真 5-6 は WEB サイト The Art Institute of Chicago, collections, Indian art of the Americas,http://www.artic.edu/aic/collections/artwork/(2017/2/1 閲覧)より
[38] 例としては、イェール大学アート・ギャラリー所蔵の Model of ballgame with spectators とよばれる遺物など（URL: http://artgallery.yale.edu/ collections/objects/ 10950）など複数存在する。
[39] イェール大学アート・ギャラリー所蔵、Ceremonial Village Scene with a Flying Figure と題された模型土器（URL: http://artgallery.yale.edu/ collections/objects/10009）
[40] シカゴ美術館の模型土器コレクションのうちの一つ（URL: http://www.artic.edu/aic/ collections/artwork/75238）
[41] Furst, 1973, pp.51-53, Fig.7.
[42] トトナカ語では kosni, オトミ語(otomí)では、ratakxöni または、rataxöni と表され、それぞれ「飛ぶ人」を意味している。
[43] シウテクートリは、時間や暦を支配する神とされている（ベサニーリャ、2011, p.27）。
[44] Sahagún 1999[1577], pp.85-86. (Libro II, Capíturo X)
[45] Durán 1967 [1579], pp.119-120.
[46] ドゥラン、1995、pp.175-176。
[47] Durán 1967 [1579], pp. 269.
[48] Garibay, 2005, p.32. 他の二篇とともにガリバイによって、まとめて出版されている。

[49] ブロス、1995、p.15。
[50] シウモルピリとは、アステカの 260 日暦と 365 日暦の暦が作り出す、52 年の大周期で、52 年に一度「2 の葦」の年に行われる暦の更新と、新たな火を生み出す儀礼である(タウンゼント、2004、pp.188-189)。
[51] Urcid, 2006, p71.